



## 話し言葉と書き言葉一考

SAM広島支部長  
株式会社ロジタント  
代表取締役 吉田 祐起



国会演説や答弁のプレゼンテーションが棒読みのケースが少なくありません。官僚が作成したからかどうかは別にしてですが、弁士の理念や情熱が伝わってこないことも稀ではありません。

この辺りになると、欧米人の演説はしたたかです。彼（女）らの演説は講演テキストを準備して臨むという意味では、日本人よりはるかに先んじていると見受けられます。見習うべきは、ゴーストライターがあるかないかの別なく、名実ともに自分のモノにして話しているってことです。自作自演って印象です。

と、こんなことに関心を持つのは他でもありません、私自身が喋ったり書いたりすることが本業の経営コンサルタントでもあるからです。とりわけ、電子メールを駆使したメッセージの作成には、話し言葉と書き言葉をミックスした、言わば整合性のあるものでなくてはならないからです。

以前、著名な講師の講演をテープ起こししてビックリしたことがあります。全く文章にならないのです。「翻訳」って表現がピッタリの作業になりました。聴いている時は、違和感はないのですが、文章化したらサッパリって感じなのです。

予算委員会などの質疑応答で質問に立った議員先生が「ワシは…」でよく始められます。ところが、「動詞」が出てこないことが少なくないことを私は意地悪く見抜きます。動詞が最後に来る日本語のセイか、ちよいうっかりって感じです。この点、動詞が主語の直ぐ後に出てくる英語の方

は合理的です。動詞抜きの話し言葉も書き言葉もありえません。

ま、そんなこともあってのことですが、このところ講演をする折には、その持ち時間が短ければ短いほど、よりの確性のある言葉を選んで内容を充実させるために、可能な限り講演全文テキストを作成して臨むことを心掛けています。ご丁寧にも「え～」とか、「あの～」とかいった接続詞も入れて、です。

数年前、広島県教育委員会を後援団体に巻き込んで実施したシンポジウムの基調講演を担当した時もそうでした。用意した全文テキストを同委員会に開示して後援団体名義を取り付けたのでした。

昨年沖縄で講演した時も同じ手を使いました。全日本トラック協会と沖縄県トラック協会共催による「近代化物流セミナー」講演がそれでした。その翌月に行った福岡講演がそれでした。愉快なことは、これら二つの講演テキスト全文が、そっくりそのまま、業界誌に分割延べ4回で掲載されたことです。

先日、地元のロータリークラブで「卓話ゲスト」を務めた時もそうでした。ムリ・ムダ・ムラを排除した正味30分間の（自称）密度の高いスピーチとなりました。題して、「デフレ経済時代における企業労使の生き方一考」でした。名実共に、自作自演、有言実行、言語明瞭、意味明確を期して、です。